

コメント

タン・チー・ベン（陳志明）

（翻訳 熊野弘子）

このフォーラムにお招きいただき、文化交渉学教育研究拠点、とりわけ木村自氏に感謝申し上げます。この拠点は文化間の交渉における学際的な議論を促進するのに非常に有益なものです。おそらくこのフォーラムは、今日のグローバル化された世界におけるムスリムと非ムスリム間の交渉、または、先住民とマジョリティの人々との交渉といった他のフォーラムの先駆けとなり得るでしょう。私が所属しております香港中文大学人類学部と ICIS はここに協力してフォーラムを開催できるでしょう。

長期にわたる歴史を扱った一つ目の報告について、私は多くのコメントをすべきでしょう。他の二つの人類学的報告は、詳細な記述を行った貴重な問題提起です。

ニール・コール（Neil Khor）報告

『インターカルチュラリズム、帝国、国民国家——リム・チェン・イン家の肖像』

ニール・コール氏のペーパーは、移住、植民地主義、国民国家形成の境界面における文化の再生産を扱った興味深い報告です。このテーマはマレーシアのペナンにおける、特徴的な華人系家族の研究を通して例証されています。リム・ヒン・レオン（Lim Hin Leong）、別名プア・ヒン・レオン（Phuan Hin Leong）は、福建からペナンへ移住し、のちに富裕者として確立しました。彼の息子リム・チェン・イン（Lim Cheng Ean 林清淵）は英語教育を受け、法律家となるべくケンブリッジで勉強をしました。彼は植民地のマレーシアでめざましい役割を果たしました。彼のこども、娘のリム・フェイク・ガン（Lim Phaik Gan）と息子のリム・キアン・シウ（Lim Kean Siew）もまたイギリスで教育を受け法律家となり、新マラヤ（1963年以降はマレーシア）において大きな役割を果たしました。リム・フェイク・ガンは国際連合マレーシア政府代表の常任大使となり、ガラスの天井を打ち破った女性の例となりました。リム・キアン・シウは社会主義戦線のリーダーとなりました。リム・チェン・イン一家を研究することにより、移住、植民地支配、新しい国家形成の背景にある文化的再生産の変容を見ることができます。彼の報告をとおして、英語話者の海峽華人アイデンティティの形成、植民地政権への関与やマラヤ政治への関与、そしてマレーシアへの同一化などを知ることができます。

コール氏はまた、ペナンのエリート華人家族間の相互関係についても述べています。

たとえば、リム・ヒン・レオンの長男リム・チェン・テイク (Lim Cheng Teik) はクー・グアット・リー (Khuo Guat Lee) と結婚し、有名なクー家とつながりを持ちました。クー・グアット・リーは、ペナンの富裕者であったコウ・シアン・タット (Koh Seang Tat) の孫娘の1人でありました。富裕者家族や彼らのビジネスのつながりといった研究 (故ジェニファー・クッシュマン (Jennifer Cushman) が、ペナンやタイにおける華人家庭について行なったような研究) は、植民地マラヤにおける華人家庭や彼らのビジネスネットワークについて我々に教えてくれます。華南福建の安溪から来たリム・ヒン・レオンについて、もっと多くのことを叙述すれば、よりすばらしいものであったろうとコメントしておきたいと思います。なぜ彼はプア・ヒン・レオンと呼ばれたのでしょうか、そしていかにして彼は富裕者となったのでしょうか。彼の子孫リム・キアン・シウの伝記は実際これらの問題に情報を与えてくれます。

コール氏は文化的なアイデンティティを分析するのに、理論的構成概念としてハイブリディティという概念を使っています。しかしこの概念には問題があります。というのも、文化とは元来混じりけのない「純粋」なものなどではなく、ハイブリディティとはじつに、しばしば相対的に漠然とした無意味な概念だからです。コール氏ははっきりと述べておりませんが、彼の報告は変容する政治的・経済的状況 (political economy) と文化の再生産との相関性、すなわち政治経済、多文化化 (interculturalization), 帰属意識との関係を実によく明らかにしております。この報告はリム・チェン・イン家の英国化と、海峡華人のアイデンティティの確立における植民地の英語教育の影響というものを実によく説明しています。この英国化は植民地のヒエラルキーによって左右されます。ウィリアム・スキナー (William Skinner) が、タイ人になることによってタイにおけるヒエラルキーを上昇していった華人について示したように、英国化した海峡華人は、山高帽をかぶり英語を話すなどのイギリスに特有の文化を取り入れたのでした。そして、リム・チェン・インが指摘しているように、華人学生としてお茶に招かれ、あるイギリス人女性と出会ってはじめて、華人は中国語を話すはずだと考えている人々が世の中にはいるのだということに、やっと気がついたほどなものでした。この英国化には、階級という要因がありました。同時にリム家は、通常ペナン・ババ (Baba) がそうであったように、中国人としてのルーツを維持していたのでした。

この報告の議論は海峡華人のアイデンティティの確立を浮き彫りにしています。ペナン海峡華人は福建語と英語を話す一方、シンガポールにおける華人はたいていマレー語と英語を話すのみであり、ペナン海峡華人とシンガポール華人は異なる、とコール氏は指摘しています。これはまさにペナン・ババとシンガポール・ババ (マラッカ・ババも同様) の相違点です。英語は別として、シンガポールとマラッカにおける華人はマレー語を話し、一方ペナンにおける華人は福建語を話しますが、かなり現地語化された福建語を話します。シンガポールとマラッカのババはプラナカンを名乗ってい

ました。ペナンにはマラッカ生まれのババとインドネシアから来たプラナカン華人とがいました。しかし、ペナンにおけるプラナカン概念を、ババをも含むものへと昇華させようとしたペナン・ババが近年いたにもかかわらず、ペナン・ババは通常プルナカンの名乗りませんでした。そうではありますが、コール氏はプラナカンのルーツについて言及する場合、これらは分類しておく必要があるはずで

す。コール氏の報告ではまた、たとえばリム・キアン・シウ著『黄金の砂地へのまなざし——ペナン家族の伝記 (*The Eye Over the Golden Sands: The Memoirs of a Penang Family*)』(Pelanduk,1997) などといった、他の現地の出版物からも恩恵を受けているといえるでしょう。そこにおいて、父リム・チェン・インに対するリム・キアン・シウの理解を知ることができます。コール氏はリム・チェン・インの海峡植民地立法評議会における役割について言及しています。タン・チェン・ロックとともにリム・チェン・インは、評議会メンバーとして最初に指名された現地中国人であったという事実は重要です。リム・キアン・シウは父が立法評議会を退場したという有名な事実について優れた記述をしました。日本占領下のリム家の記述もありますし、コール氏の有意義な研究の質を更に高めうる記述もあります。

最後になりますが、リム・チェン・インは1936-37年、海峡華人英国協会(ペナン支部)の代表者でした。コール氏はおそらくこのことをよく知っていたでしょうし、彼にとってこのことを報告に加えることは難しいことではないでしょう。全体的に彼の発表はこのフォーラムのテーマに非常に関連した報告でした。

ウミン・イテイ (Umin Itei/日宏煜/Hung-Yu Ru) 報告

『日本人と直面して——植民地下(1895-1945)のタロコ社会における植民地主義、近代化、伝染性肝疾患』

この報告は、台湾の原住民タロコ族に科せられた日本の植民地規則の影響を、日本が実施した健康関連政策を研究することにより述べている点で非常に興味深い論考です。

大きな問題点が2点明確に述べられています。すなわち、一つ目が注射器と注射針の使い回しによって、不幸にも肝臓疾患の増加につながった予防接種政策であり、二つ目が植民地支配政策として行なわれ、同様に肝臓疾患の増加を引き起こすことになった商業用アルコール消費の奨励です。私は普段統計を重用しない人類学者ですが、このケースでは、日本が作ったルールに始まり植民地時代に終わる肝臓疾患の増加を示す統計が有益なものであると感じました。

この報告は、植民地政府によってなされた、タロコ族の中央山脈から台湾東部の秀

林郷沿岸部への再定住化に言及しています。再定住が生態学的あるいは食生活上、彼らに影響をもたらしたのかどうか、そしてそれが結果的に肝臓疾患増加の原因となりえたのであろうと議論することは有益です。ともかくも、タロコ族への生態学的かつ社会的影響や、文化的再生産との関連を知ることは重要なことです。

台湾原住民にあまりなじみのない人々にとっては、中国語で普通「太魯閣族」として理解されているタロコ族に関して、より多くの民族誌的記述があればもっとよかつたのではないのでしょうか。日本統治下の彼らに関するスライドは有益なものですが、しかし近年の発展や変化について記述したほうがより適切であったのではないのでしょうか。例えば、タロコ族が2004年になってはじめて、台湾政府から独立した原住民として認められたのだということに、多くの読者は間違いなく興味をもつでしょう。

この報告は肝臓疾患増加と日本の植民地統治についての詳細を多く含んでいます。その時代の出来事の記憶について、現在のタロコ族に対して行なったインタビューや歴史史料の両者から、タロコ族の声を上げていけばよりすばらしいものであったろうと思います。この報告はまた、タロコ族の経験を、例えば植民地政府や伝道者による再定住後のタスマニア・アボリジニの運命のような、他の先住民族の経験と比較することによって、より大きな学術的領域に関連付けられることができるでしょう。タスマニアのアボリジニもまた、病気（たとえば性病（VD: venereal disease））やアルコール消費に苦しんできました。

木村自報告

『「夷地」像の相克——上ミャンマーにおける雲南ムスリム移民の憑依現象を事例として』

この報告の1つのテーマは、非漢人先住民族を妖術使いと見なしていた漢人の、彼らに対するイメージについてです。そのような認識は先住民族に対する「未知の恐怖」に起因しているようです。報告の1頁に「他者性は精霊憑依のディスコースに埋め込まれている」と述べられているとおりです。このことは我々に、ミャオ族を他者化する方法として、彼らを妖術使いと見なしていた漢人に対する、ノーマ・ダイヤモンド（Norma Diamond）の記述を思い起こさせます。

木村氏は、雲南ムスリムが「野蛮な他者」が原因と考える精霊憑依のディスコースについていくつかの事例を紹介しています。ユーランの章句の朗唱を含む呪術的な儀式が、患者を治療するために行なわれます。これらのケースは非常に興味深いです。木村氏は漢人と雲南ムスリムを他者、「夷（yi）」に関連付けて、マジョリティとして述べていますが、「野蛮な」他者に対する視点として、漢人と雲南ムスリムの間に差異

はあるのでしょうか。また、上ミャンマーの雲南ムスリムは、全面的な漢人アイデンティティを重視していたのでしょうか。

木村氏は本文中において1,2箇所、あたかも報告の理論的概念であるかのように「ハイブリッドな主体」という概念に言及しています。これは曖昧な概念であり、この報告においてそれは我々に何かを教示してはくれません。実際には、エスニック境界論が、妖術や儀式、エスニック間関係やエスニック認識を分析するのにより有益な理論的枠組みです。

この報告は、非イスラームの慣習にも従う雲南ムスリムを扱っており、イスラームやその人々についてより多くの議論があればよかったと思います。妖術に従事することやそれに関係のある「呪術」を使うことは、イスラームの教えや少なくともイスラーム実践と交渉することを含み、文化全体の再生産に大きな役割を果たしたに違いありません。イスラーム出現以前の信仰や宗教実践に従うムスリム社会は、他にもあります。ムスリムであるマレー人は、その「呪術」でよく知られています。そのような他のケースとの比較によって、この報告は学界のより広範な領域へ、さらなる興味を引き起こすことだと思います。全体的に木村氏の報告は、儀式、文化間交渉、文化の再生産の議論に貢献しています。